学　界　展　望

（神奈川大学）大　原　美　範

ブラジル経済

近年ブラジル経済について多数の著書，論文が発表された。ラテン・アメリカ諸国のうちでもきわだって多いといえるが，これは移住を通じてわが国と親密な関係にあったブラジルが，１９６０年代の両国の飛躍的経済成長を通じて一層緊密関係を加え，特にブラジル経済の高度成長に対するわが国の関心が高まった結果である。わが国におけるブラジル研究については日本ブラジル中央協会から「日本におけるブラジル研究 ― 文献目録」が出版され，多数の著書，論文を集録しているが，本論では最近のブラジルの経済成長を論じた以下の著書，論文をとりあげてみたい。

① 東田直彦『ブラジル経済と日本 ― 企業進出の可能性を探る』日本経済新聞社，１９７３年。

② 桑村温章『ブラジル ― 変貌する経済と社会』時事通信社，１９７５年。

③ 小坂允雄編『ブラジルの企業』アジア経済研究所，１９６９年。

④ 長谷川洋四編『ブラジルの企業金融』アジア経済研究所，１９７４年。

⑤ 加賀美充洋，小坂允雄『年次経済報告 ― ブラジル１９７５年』アジア経済研究所，１９７６年。

⑥ 加賀美充洋『年次経済報告 ― ブラジル１９７６年』アジア経済研究所，１９７７年。

⑦ 加賀美充洋『年次経済報告 ― ブラジル１９７７年』アジア経済研究所，１９７８年。

⑧ 藤田正寛・西向嘉昭「ブラジルの金融制度」（高垣寅次郎監修『世界各国の金融制度』第９巻，大蔵財務協会，１９７４年）。

⑨ 西向嘉昭「輸入代替的工業化政策の一視点（Ⅰ・Ⅱ）― とくにブラ

ジルに関連して」（経済経営研究年報，第２１巻第２号，第２２巻第１号，１９７２年３月・８月）

⑩　西向嘉昭「ブラジルの経済成長と工業製品輸出」（国民経済雑誌，１９７５年２月）

⑪　西向嘉昭「ブラジル経済の高度成長 ― その回顧と展望」（経済経営研究年報，第２３巻第２号，１９７３年８月）

⑫　水野一「ブラジル経済高成長の要因 ― ラ米における新しい発展モデルの特徴と問題点」（世界経済評論　１９７３年１月号）

⑬　水野一「ブラジルの経済成長と所得分配」（上智大学外国語学部紀要第７号，１９７２年）

⑭　小坂允雄「ブラジル経済の高成長と石油危機」（アジア経済第１８巻第１０号，１９７７年）

⑮　加賀美充洋「ブラジルにおけるインフレーション」（アジア経済第18巻第１０号，１９７７年）

①②は学術論文の形式はとっていないが，ブラジル経済について独持の視点から書かれた労作である。

①（東田直彦）は，まえがきで述べているように，発展途上国の問題を扱うにあたり，経済成長への処方箋を農地解放をはじめとする経済社会構造の改革，経済主体の変革に求め，その分析を行なうだけで十分なのか，という疑問から発し，経済を循環として把えられるのではないか，との考えに立っている。「Ⅰ軌道にのる経済成長」において，公共部門が各種経済部門に大きな比重をもつようになり，産業の跛行性を小さくし，その発展を促進したことを指摘し，国営企業を先頭に拡大したブラジル経済を支えたものとして金融・資本市場の整備とそれによるインフレ抑制政策をとりあげ，ブラジルの経済成長を実現した諸要因を経済の循環過程で明らかにしようとする。この点で経済社会構造の問題に力点をおくラテン・アメリカ研究とは分析の視点を異にするといえる。その結果，インフレーションについての構造学派を，病源を問うのみで現実の発熱，悪寒を生むメカニズムを明らかにしておらず，対症療法のとりようがないと評する。インフレ対策における構造学派の論理あるいは経済社会の構造分析を主眼とする発展途上国研究の評価の仕方に問題はあるにしても，これら構造

分析を主眼とする研究の限界を示し，それを補って経済の循環として把える分析を示しているところに本書の特色を見出すことができよう。「Ⅱ合衆国の成立と統一」では軍の役割を再評価し，「Ⅲ世界経済におけるブラジル」では経済開発の方向，外資と輸出との関係，輸出競争力の強化について述べる。「Ⅳ日本・ブラジル関係の展望」において日伯補完関係を資源の面，資本，技術の関係から検討し，日系企業の問題点を分析している。特に技術供与について，わが国企業の側に技術を独立の生産要素として提供する考え方が欠落していることを指摘する。本書の標題からも示されるようにわが国企業の進出に関する分析はその主題であり，評価するに足るものである。

②（桑村温章）は，ブラジル経済が近年急速に変貌し，「奇跡的」といわれるほどの成長を達成した過程を分析し，国土の開発と諸地域の市場性を検討し，その国際関係を展望し，わが国との関係に言及している。著者の3年余にわたる現地経験に裏打ちされ，急激に変化しているブラジル経済に平易に叙述したユニークな著作である。最初にブラジル経済が第二次世界大戦後工業化を進め，重化学工業の発展をとげた過程を明らかにする。また工業部門の急速な拡大にもかかわらず農業部門の遅れが目立ち，国民経済の均衡的発展につながらなかったことを指摘している。このような状況のもとで１９７０年代から輸出主導型工業化政策が実施され，貿易を中心とする構造変化がみられるようになったとし，輸出振興がブラジル経済成長の鍵であるという。ついで広大なブラジルの地域的特殊性に目を向け，その開発状況および市場性を分析する。先ず「Ⅱ未開をひらく国土開発」では，ブラジル経済の地域格差に焦点をあて，未開発地域である東北部，アマゾン地域，南部のフロンティアの開発を詳述している。アマゾン地域の開発は第１に道路網の建設であるが，道路網の建設は東南部の発達した地域の商品の流入を促進し，地域の発展にむしろ不利な条件ともなりうることを指適し，同じような現象がすでに東北部におきているという。「Ⅲ地域市場と流通機構」では人口増加，都市化の進展による地域市場の形成をとりあげ，メトロポリタン地域なかんずくリオ・デ・ジャネイロ，サン・パウロベロ・オリゾンテの経済圏を中核として形成される「ブラジルのルール地方」がやがてはメガロポリスに発展する可能性について示唆する。これら地域市場における流通機構を主要商品について述べており，本書の最もユニークな部分であるといえよう。「Ⅳ　ブラジル経済と国際関係」ではブラジルの国際経済

関係を論じ，わが国の企業進出について，量的に多くの企業が進出することより，質的に「善良な企業市民」が求められるという。またブラジルが中南米のなかの一国であることを認識し，ブラジルへの投資が過度に大きくなることを懸念し，他の資本輸出国や中南米諸国との関係を考えて特定の国に偏することなく，多くの国と共存関係を強めていくことの必要を指摘している。

⑧（藤田正寛）は第2章以下にブラジルの金融構造の特徴をあげ，通貨・金融制度の沿革を述べ，中央銀行はじめその他もろもろの金融構関について説明し，金融・資本市場，為替制度，資本構造およびマネー・フローを分析し，最後に革命後の金融動向を明らかにしている。ブラジルの金融制度は特異な形をとっており，いわゆる中央銀行業務もブラジル中央銀行に統一されず，大蔵省，ブラジル銀行などにまたがっているので説明の難しいところであるが，資料を豊富にそろえて行き届いた解明がなされている。難を言えば説明の詳しいところと簡単なところとが目につき，古い統計しか揃わないところがあるが，資料が整備されていないブラジルの現実を示すものであり，止むをえないことと思われる。

④（長谷川洋四）は企業の資金調達の方法を金融・資本市場，外資流入機構のなかで把握することを目的に作成されたものであり，特にブラジルに投資しているわが国企業がどのようにしてその所要資金を調達するかという観点から書かれている。企業の資金調達の観点から書かれているので，内容は具体的であり，実務上の要求にも答えうるものになっており，⑧の金融制度についての説明を補なうものとして意味がある。

③（小坂允雄編）はブラジルの企業および企業集団についての研究である。第1部ではブラジルの工業化および企業集中化の過程を概観した上で国立リオ・デ・ジャネイロ大学社会科学研究所が実施した企業集団に関する調査の一部の飜訳を加えている。第2部は主要企業集団を中心とする企業のリストをのせており，ブラジルの主要企業を網羅している。ブラジルの企業集団に関するもっとも詳細な調査である。

小坂氏の企業集団に関する研究は⑤において「V　現代のブラジル経済構造 ― 大企業体制の発展」となり，公企業，外資系企業の発展，企業集団の構造について詳細な資料による説明がなされる。③と並んでブラジルの企業および企業集団の研究として特記されるものである。

⑭（小坂允雄）は１９６７～７３年間の奇跡と呼ばれた飛躍的成長期に大きな役割を果した貿易部門，公的部門，工業部門の拡大過程およびその後の石油危機後におけるこれら諸部門の変動の過程を明かにしたものである。この３部門は高度成長期を支えた重要部門であるが，公的部門においては基礎産業分野に独占的地位をもつ公企業を中心として分析を進め，工業部門では外国系企業の問題を論じている。ブラジルの高度成長期を分析するに企業の観点から取り組もうという独自性をみせた論文であって，小坂氏の前掲書③，⑤と一貫した問題意識をのぞかせている。欲をいえば⑭においても③⑤に示された研究実績を十分に生かして，企業の発展を詳細に分析してほしかった。

⑨（西向嘉昭）はラテン・アメリカにおいて輸入代替的工業化がやむをえない方向であったことを明らかにした後，ブラジルの工業化政策と輸入代替を論ずる。ブラジルにおいて輸入代替は無差別，過度の保護のもとで進行したものとは限らず，生産財部門においても国際競争力をもつ商品があらわれたという。その例として鉄鋼業の能率についてのWerner Baer，Joel Bergsmanの調査結果をあげ，ブラジルとその他諸国との鉄鋼価格，生産コストの比較を示し，ブラジルの鉄鋼価格は種類によってはヨーロッパの製品と格差がない，というBergsman の説明を紹介している。資本財産業についてもＥＣＬＡの調査結果を引用し，国際競争力をもった製品があるという。本論文においてブラジルの資本財産業特に鉄鋼業の能率に関する研究成果はよく紹介されている。しかし，以上の研究結果は多くの条件付きで論じられている問題である。ブラジルの鉄鋼価格は国内諸税の減免，企業経理上の特典によって引下げられた部分が大きく，生産コストの低下を反映しているとは限らない。生産コストの面では資本コストの重要性が大きいが，インフレなどによる正確な計算は困難であり，Baerも信用できるデータの不足を認めている。従ってBaerの資料から直ちに楽観的な結論を引き出すことには問題があり，Baerの調査の諸条件を検討する必要があるように思われる。

⑩（西向嘉昭）はブラジルの工業製品輸出の内容，輸出先を分析し，輸出増加の原因を明らかにしている。工業製品輸出増加の要因として，為替レートの小刻み切下げ方式，税制上の優遇措置，経済不況の輸出刺激効果をあげ，特に重化学工業製品輸出の場合に言及し，William G.Tylerの説明を紹介している。

⑪（西向嘉昭）は１９６８年以降の高度成長期を論じ，高度成長の諸要因として，政治の安定を背景に(1)インフレ抑制とインフレ効果中和策ともいうべき政策手段，(2)輸出の急増，(3)税制上のインセンティブを通ずる民間投資の誘発，(4)第１および第３項の結合効果として貯蓄率が高められた，(5)外資の積極的な導入政策，をあげる。本論文と同様の研究は⑫にもみられる。

⑫（水野一）は高度成長の要因として⑪とほゞ同様の要因をあげた後，この「ブラジル・モデル」の特徴として，第1に輸出を最重点政策として重視していること，第２に工業と農業の均衡的発展，第３にインフレ抑制に力を入れたことをあげ国連ラテン・アメリカ経済委員会の路線とは異なった政策がとられたことを強調している。さらに高度成長を続けるブラジル経済の問題点として，国際収支，地域格差，所得格差の拡大をあげる。特に第３の所得格差についてはブラジル内外からきびしい批判が向けられているとし，⑬においてCarlos Geraldo Langoniの分析にもとづいて実態を説明し，さらに所得分配をめぐる論争を紹介している。

⑮（加賀美充洋）は通貨価値修正制度の概要を述べ，その効果としてインフレによる歪みをとり除くことにより経済活動を正常化し，物価の安定に寄与した点をあげる。その結果高度成長を維持し，国際収支を改善し，金融・資本市場を確立することができたという。しかしこの制度にも問題があるとし，第１に，インデックス付の資産とそうでない資産とがあることから，インデックス付資産の増加をもたらし，資金の偏在を生じた。第２に，インフレの存在を前提にしている。第３に，価値修正付資産をもつものが有利になり，分配に格差を生ずる，点をあげる。ついで１９６４～７３年と１９７４年以後の物価変動要因を計測し，１９６１～７３年の物価上昇には食料品価格と最低賃金の引き上げが，１９７３年第２四半期～１９７６年第４四半期には食料品価格と名目賃金の上昇が大きな意味をもったとする。ここからブラジルのインフレ対策としては賃金を除くと農産物価格対策が最も重要であるとする。本論文はブラジルのインフレ対策として世界の注視を集めている通貨価値修正をとりあげ，インフレとの関係を論じ，インフレの原因を解明しようとした。通貨価値修正とインフレとの相関々係についてさらに究明することが望まれるが，この種の論文としてきわめて水準の高いものであるといえる。アジア経済研究所による昭和５３年度優秀論文の選考過程で３点にしぼられたときにその１点として残

されたのも当然である。2点が表彰され，本論文は最終段階ではずされたのであるが，上記機関によるブラジル研究論文の表彰はいまだなく，加賀美氏が次の機会に最初の表彰論文筆者となることを期待したい。